

「わかる。ぼくも主人公のワクワクしている気持ちと一緒に。」

ぼくはサワガニを捕まえに川に行った時、土手の草むらの中で、生まれて初めて動物の頭の骨を見つけた。

「何だこりや。何の動物の骨かな。イタチかテンなどの小動物かな。」
とビツクリしたし、不思議に思った。

何の動物の骨か調べるために、図鑑を読んだり、ミュージアムで色々な動物の骨と比べてみた。
「こんな小さいのに、イノシシの骨なのか。」
とさらにビツクリした。ぼくは、イノシシを探すために、足久保の山や里ハ川でフィールドワークを始めた。フィールドワークをする時、今日は動物に会えるかな。動物のうんちや骨を見つけれられるかな。と新しい発見をしたくて、毎回ワクワクしている。

フィールドワークでは、川でイノシシのフンを見つけた。とても小さくて、大きかった。

周りは竹林で、よく見るとフンの中にたくさん竹の子が入っているようだった。皮をむいてやわらかいところを食べるんだなと思った。近くにイノシシのすを見つけたので、イノシシが突進してこないかと不安になった。森林の中ではイノシシの大型の骨を見つけた。きばが長くてビツクリした。初めて拾った骨と比べると鼻がのびていて、後頭部の形がちがうことも発見できた。

森で野生のカモシカに出会えた。カモシカは目の下を木にこすりつけたり、モミジの葉を器用に食べていた。ぼくがじっと観察しているも、カモシカは逃げずにずっと目が合っていて、まるで「のんびりした友達」のような気持ちになった。

また、モグラは外側に向いた大きな手を持ち、とてもなめらかな毛でおおわれていた。自分の体より大きい鹿のフンをす穴に運ぶオオセンチコガネを見た。これまで知らなかった動物の生活にふれる事ができて、とてもう

れしかった。

このように、里山などの自然は、ぼくにたくさんの発見や感動、色々な質問やこわさも与えてくれる。この自然に人や動物が住まわせてもらっているところ、あらためて感じた。

ぼくの歩いた道には、きれいな茶畑やわさび田、竹林、どんぐりの森などがある。ともきれいにされている場所もあれば、放置されてしまった畑や茶畑もたくさんある。出会う人ほとんどがおじいちゃん、おばあちゃん

だった。これは、森里川海のピンチではないか。ぼくの大好きな生き物がいなくなってしまう。だからぼくたち若い人は、今自然を守ってあげているお年よりとも協力しなければいけない。

ぼくは、野生動物の住むかんきょうの研究を通して自然の大切さを伝えていきたいと思っている。動物も人もくらしやすいかんきょうを残せたらいいな。